

文化遺産国際協力法成立記念

国際シンポジウム「危機にさらされている世界遺産をどう守るか」開催

日本ユネスコ協会連盟は、NHK、毎日新聞社との共催で、去る10月24日、東京国立博物館で国際シンポジウム「危機にさらされている世界遺産をどう守るか」を開催しました。本シンポジウムは、今年6月に採択された「文化遺産国際協力法」を記念して企画され、210名の参加者のもと、さまざまな専門家によって「今後、どのようにしてアジアの危機遺産を保護していくべきか」が話し合われました。

第1部では、オマラ・カーン・マスーディ / カブール国立博物館館長が「文化復興による国家再建」、クウォン・クン・ニアイ / アブサラ機構遺跡考古 局長が「アンコール遺跡の今～遺跡保存に向けて～」、テオドール・B・バギラット Jr. / 前イフガオ州知事が「コルディリエラの棚田と無形文化の保護」、サイードムラッド・ババムラーエフ / 国立古代タジキスタン博物館館長が「発掘によるアジナ・テペの発展」と題してそれぞれの国の現状について講演しました。

第2部では、平山郁夫 / 日本ユネスコ協会連盟副会長・ユネスコ親善大使の「文化面からの日本の国際貢献」についての記念講演の後、西村幸夫 / 東京大学教授をコーディネーターに迎え「危機にさらされている世界遺産をどう守るか」と題して、平山郁夫、テオドール・B・バギラット Jr.、クウォン・クン・ニアイ、前田耕作 / 和光大学名誉教授、はな / モデル・エッセイストの各氏によるパネルディスカッションが行われました。



「世界遺産の保全・保護は形のある物だけが対象ではなく、人の心の中に創られるものである」「世界遺産の地に住んでいる人びとが、先祖からの伝承文化に自分のアイデンティティを重ね、その文化の持つ意味、価値を十分に認識することで、真の意味の保全が可能となる」などのコメントが交わされました。西村氏は、「それぞれの世界遺産登録地はさまざまな問題を抱えているが、つきつめてみると世界遺産登録地特有の問題ではなく、普遍的な人間社会の問題であるのではないか。世界遺産ということばの「世界」に込められた意味は、国際 (International) ではなく一つの「世界」。世界の人びとが互いを理解し、共に考え、協力して問題を乗り越えていくことが世界遺産の心だと考えられるのではないか」と結びました。

世界遺産に関する詳細はこちら <http://www.unesco.jp/contents/isan/about.html>

危機遺産に関する詳細はこちら <http://www.unesco.jp/contents/isan/crisis.html>